

曾我蕭白筆「雲龍図」襖（十念寺蔵）について

安井 雅恵

1. はじめに

上京区の十念寺に所蔵される曾我蕭白筆の襖絵「雲龍図」4面（図1，以下「本図」とする）が，平成28年4月1日付で京都市の有形文化財（美術工芸品）として指定された¹⁾。

曾我蕭白（1730～1781）は18世紀後半に活躍した京都出身の絵師であるが，今日知られる代表的な作品—とりわけ障壁画の大半は京都市外に伝来している。これは，絵師として最も脂が乗った30代の時期に，もっぱら伊勢や播磨といった京都以外の地域で活動しており，京都定住は40歳頃から亡くなるまでの10年にも満たないためであろうが，現存作の分布という観

点からすれば，本図は京都市内に残る貴重な蕭白の障壁画と言える。しかし，本図は，従来の蕭白研究において，ほとんど言及されることがない。そこで小稿では，指定に関わる調査で得られた新史料などを合わせ，改めて本図を紹介したい。

2. 先行研究

まず，先行研究を確認しておきたい。前述の通り，本図についてまとまった論考は存在しない。

本図を最初に紹介したのは，宮島新一氏で，「市中には珍しい曾我蕭白の雲龍図の断片が現存する」とし，落款の「震えたよ



図1 曾我蕭白筆「雲龍図」4面（十念寺蔵） ※非公開

うな書体」から晩年の作と推測している²⁾。

佐藤康宏氏は「蕭白新論」³⁾において、40歳代の蕭白に対して、京都でも支持層があった例証のひとつとして本図をあげるが、一方で、「ボストン美術館の『雲龍図』と十念寺の『雲龍図襖』を比較すれば、後者の萎縮ぶりは無残といたいほどだ」とも述べている。

小嵯善通氏は、作品解説⁴⁾で、本図と同図様の雲龍図が桃山時代後期に流行を見ており、そうした先行作に触発された可能性を示唆しつつ、「蕭白独自の個性に彩られて見るものを圧倒する」と述べる。

以上が本図に言及した先行研究の全てである。制作年代については、宮島・佐藤両氏が蕭白40歳代以降という点で一致を見ている。注目したいのは、宮島氏が本図を「断片」とする点である。つまり、本来1室分、あるいはそれ以上の面数の蕭白の障壁画が制作されており、本図はその一部のみが残ったとの解釈である。この見解には、残片である障壁画が、当初から、現有する所蔵者のために制作された作品か否か、という疑問も含まれるだろう。確かに、当初の建物から移される際、新たな建物に合わせるため、面数を減らし、切り縮められて、現在まで伝えられた障壁画は多い。この点については後述することとする。

言説の少なさに比例してか、展覧会への出品履歴はない。十念寺でも公開しておらず、通常は保存のために収納されている。このため研究者でもほとんど実見する機会はなく、京都市内に伝存する数少ない蕭白の障壁画ながら、ほぼ等閑視されていたと言える。

3. 作品の概要

それでは、作品の現状について見ていこう。

本図は襖4面からなり、絵は片面のみに描かれている。

一般的に寺院の襖の場合、通常、縦方向に5枚の紙を継ぐものが多いが、本図は縦35cmほどの紙を6枚継いでおり、高さが2mを越える大型の襖となっている。向かって右から3面目の上部に、龍の顔が見える。瞳はやや上方に点じられており、襖絵を見る者を絵の中から見返すかのようなのである。龍の頭の上に体部が続き、頭部上方に大きな爪、そのすぐ右側に尾の先が並

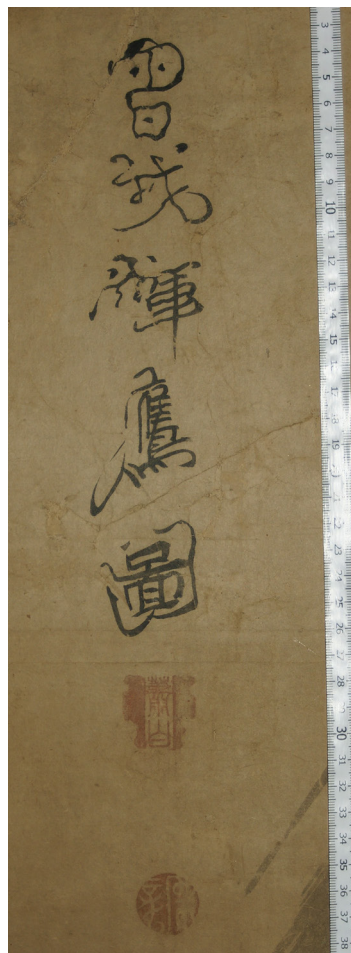


図2 「雲龍図」落款

ぶ。角も髭も、右側しか描かれていない。髭は長く、画面の下部を横断する。

龍の周辺はむらむらとした墨で塗り込められている。向かって右から1・2面目の中ほどには黒々とした渦が描かれている。蕭白の代表作「群仙図屏風」（文化庁蔵）や「風仙図屏風」（ボストン美術館蔵）などにも同様の渦が描かれ、観者に強烈な印象を与える。前者では龍の出現で巻き起こった風と考えられ、後者では陳楠とされる仙人が召喚した龍そのものと解釈されているが⁹⁾、ここでは「群仙図屏風」と同じく、龍の出現に伴う風と見なせよう。また2面目の下部の薄墨による円弧は「群仙図屏風」や「龍図」（石山寺蔵）に取り合わせられたモチーフや、「獅子虎図屏風」（千葉市美術館蔵）や「柳に亀図」（個人蔵）の水流を参考にすると、波濤と思われる。

4面目の中ほどに「曾我輝鷹図」の署名があり、「蕭白」（朱文壺形印）「師龍」（白文円印）2顆を押す（図2）。「蕭白」印は安永7年（1778）春の年紀がある「蘭亭曲水図」（個人蔵）より、やや欠損が進んでいるので、本図はそれ以降の制作と考えられる。

4. 『十念寺大年譜』

本図を所蔵する十念寺は華宮山と号する、西山浄土宗の寺院である。寺伝では、永享3年（1431）、後亀山天皇の皇子、真阿に帰依した足利義教が誓願寺中に一字を建立したのが始まりとされ、豊臣秀吉の都市整備に伴い、天正19年（1591）に現在地に移ったとされる。江戸時代に入り、延宝の大火（延宝3年（1676））で総門と

鐘楼以外の建物すべてを、天明の大火（天明8年（1788））で書院、庫裏、本堂を焼亡した。現在の客殿は天明の大火後、檀家である三代目丹波屋源助の多大な寄付により再建された。再建年代は不明であるが、過去帳によれば、丹波屋源助は文政7年に亡くなっているため、それ以前に再建事業が開始されたと考えられよう。

本図は現客殿の書院と仏間の境の襖であるが、制作は蕭白の没年である安永10年（1781）以前であり、どの建物のために誂えられたのかは不明であった。かつ十念寺には、本図の他に蕭白の襖絵は伝存していない。このため、当初の員数は何面であったのか、そもそも十念寺のために制作されたものであったのか、不明な点が多かった。宮島氏が本図を「断片」とされたのも、このあたりに要因があると思われる。

ところが、この度の指定に関わる調査で、新たな史料が見出された。

『十念寺大年譜』は十念寺に伝来した年譜で、第22世住持の洗空が編纂したものである。その「戊戌七」（安永7年）の項

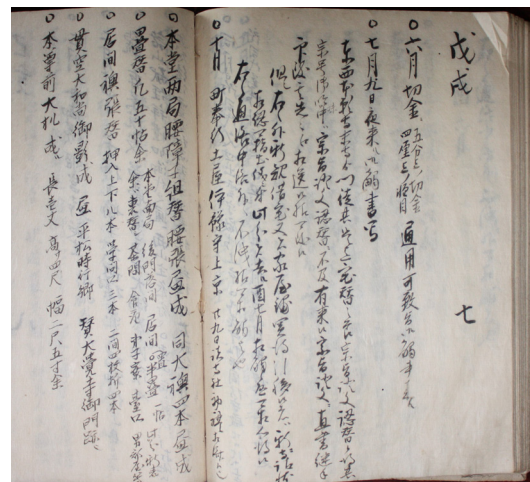


図3 『十念寺大年譜』（十念寺蔵）

に、以下の記述がある（図3）。

本堂両局腰障子組替，腰張画成，同大
襖四本画成（読点は筆者）

この記事は、安永7年中に本堂の大襖の
絵が制作されたことを示している。絵師に
関しての言及はないものの、落款から判断
される制作時期及び「大襖四本」という特
長が本図と一致しており、この記述が本図
に該当する可能性が高いと思われる。10
月29日の記事に次いで記されるので、そ
れ以降の出来事とも考えられるが、記事の
時期が前後する場合も見受けられるので、
断定は避けておきたい。

過去帳によれば、洗空普明は、延享3年
（1746）3月から天明3年（1783）8月に
63歳で示寂するまで、38年間十念寺に在
住している。『十念寺大年譜』は、日記等
の一次史料ではないが、当該記事は、まさ
に住持として洗空自身が経験した出来事
であるので、史料としての信憑性は高いと

思われる。

すなわち、本図は安永7年に十念寺本堂
の障壁画として制作されたもので、制作当
初から大襖4面であったと推定される。同
時に腰障子の貼付画も制作されたようで
あり、波濤などで図様が連続した可能性も
あるが、少なくとも龍を描いた大画面とし
ては4面で完結したと見て大過ないだろ
う。当初、本堂の障壁画として制作された
本図は、天明の大火から運良く助け出さ
れ、客殿再建に際して再利用されたと考え
られる。

過去帳によれば、天明の大火で焼亡した
書院の障壁画を制作したのは、海北派の4
代目海北友泉である。友泉の障壁画は現存
しないが、十念寺は海北家の菩提寺であ
り、友泉筆の「西山上人像」や3代目友竹
筆「達磨図」なども所蔵されている。海北
家の菩提寺に、蕭白の襖絵が描かれるこ
とになった経緯は不明ながら、近年まで、同
寺には、蕭白筆「七福神扁額」が所蔵され
ており、先々代の住職の時代まで書院に掛



図4 「雲龍図」部分

けられていたという⁶⁾。現在は所在不明となってしまったようであるが、複数の遺作の存在は、一時期、十念寺と蕭白の交遊があったことを想像させ、興味深い⁷⁾。

5. おわりに

本図が制作された安永7年は蕭白49歳にあたる。この時期は、30代の蕭白の代表作に見られたエネルギーかつ奇々怪々な作風が影をひそめ、比較的穏当な作品が多く制作され、中でも高度の筆技が如実にわかる水墨の風景画が高く評価されるようになる。

そうした京都時代の作品群において、本図は、小嵯氏が指摘されるように、先行作品の構図に学びながら、襖4面を危なげなくまとめている。この「無難さ」により、「雲龍図」襖（ボストン美術館蔵）や、「群仙図屏風」（文化庁蔵）など、蕭白風が横溢する作品と比較すると、見劣りがしてしまうのは否めない。しかし、2メートルを越える大きさの襖は、実見すれば迫力があり、飄逸な龍の表情（図4）も壮年期の作品に共通する趣を感じさせるものである。

また、すでに佐藤氏が指摘されるように、本図は京都での需要者層の広がりを示すが、史料の存在により、本図の制作年と伝来の経緯が明らかになったことで、十念寺との関わりを再確認できた。これまで、京都での蕭白の交遊は禅僧を中心に語られることが多かったが、本図は宗派の別なく蕭白画が求められたことを示す好例と言えよう。

註・参考引用文献

- 1) 指定名称は「客殿障壁画〈曾我蕭白筆／〉」。紙本墨画。4面。法量は各面縦206.8cm、横92.2cm。
- 2) 宮島新一「(作品解説) 紙本墨画雲龍図」(京都府文化財保護基金(編)『京都の江戸時代障壁画』, 1978年, 22~23頁)
- 3) 佐藤康宏『新編名宝日本の美術 27 若冲・蕭白』(小学館, 1991年)所収, 103~145頁。引用箇所は142頁。
- 4) 小嵯善通「(作品解説) 雲龍図障壁画」(京都市文化財保護課(編)『京都市文化財ブックス第7集 近世の京都画壇 画家と作品』, 1992年, 41頁)
- 5) 狩野博幸「(作品解説) 風仙図屏風」(『もっと知りたい曾我蕭白 生涯と作品』, 東京美術, 2008年, 44頁)
- 6) 味方健『十念寺の六百年』(十念寺, 2013年, 82~84頁)及び同氏の談話による。
- 7) これに関連して記憶しておきたいのは、十念寺に所蔵される「仏鬼軍絵巻」が、江戸時代には一休宗純の自画作とされていた点である。元禄10年(1697)「仏鬼軍絵巻」を元にした版本が刊行されており、十念寺18世住持沢了による跋には、一休宗純の自画作と記されている。これは広く知られたようで、『都名所図会拾遺』の十念寺の項にも「『仏鬼軍図』一休和尚の筆なり。(中略)当寺什宝とす」とある(本井牧子「室町時代物語『仏鬼軍』について—新出版の紹介をかねて—」『京都大学国文学論叢』5号, 2000年, 1~19頁)。蕭白が禅僧とつながりがあったこと、自身「曾我」姓を名乗っていたこと、絵入版本を参照して作画を行っていたことなど、十念寺との接点は様々な側面から推測できるように思える。

掲載写真：図1は三原昇氏，図2・4は安永拓世氏，
図3は筆者による撮影。

やすい まさえ
安井 雅恵 (文化財保護課 主任 (美術工芸品担当))